

# 第3回神戸市立工業高等専門学校 今後のあり方検討委員会の概要

令和3年7月2日



# 第2回会議の振り返り

(主な委員意見)

## ●神戸高専と他の大学法人を一体運営する際の留意点

- 国立大学法人の事例では、地域との関係や研究・教育内容が異なる中で、国が特定の指標で評価して資金を分配することに難しさがあった。今回の事例では、市が神戸高専と公立大学法人の思いを確認しつつ、市としてどのような教育・研究を望むのか議論できる点で、先行する国立大学法人の抱える課題に対応できるのではないかと感じる。
- 神戸高専の地独法化を設計する際は現場の苦勞、課題があまり生じないような形で、合わせて外部資金の獲得についても方策を考える必要がある。
- 高専の教員は、教育と研究の両方が求められるのだが、教育に比重を置いた場合は大幅な節約や競争的資金・外部資金の獲得に労力を割くのは、今の高専の規模では難しい。



# 第2回会議の振り返り（続き）

## （主な委員意見）

- 外部資金の獲得について、国立大学では法人化後、学部間の連携を進めて特許等を組織的に売り込む活動を行っている。海外では大学が学部横断的に構築したコンソーシアムに企業を呼び込んだ資金獲得事例もあり、今回検討している神戸高専と大学の枠組みの中でも、大学が産業界と学部横断的なコンソーシアムを構築してイノベーションデザインを取り入れた活動が出来れば、教育・研究、産業界への貢献に関して新しいものが生まれるチャンスになり得る。
- 学校が一緒になるという点において、通常は補完関係やシナジー効果を期待するのだが、単純に1足す1が2にならない世界だ。大学が持っている教育のリソースが、高専と一緒にすることで本当に融合できるのか、教員リソースをどうするのかなど、検討が必要な部分が出てくる。
- 一体運営する大学法人が示している改革の方向性と、本検討委員会でこれまで検討して提言された神戸高専の方向性が上手くマッチすることが重要だ。



# 課題解決と理想の将来像の実現に向けて

(主な委員意見)

## ●優先的に一体運営を検討すべき相手について

- 神戸市看護大・神戸市外大との教育・研究内容の親和性があるのか、一体運営のメリット・効果を検証する上で、教育研究内容の重なり、類似性等を確認しておく必要がある。
- 高専の学生には国際化という意味で是非語学力を身につけてもらいたいが、神戸市外大のコース制では法律・経済などが学べることも含め、両大学の概要を見ると、親和性は神戸市外大の方が大きいと感じる。
- 神戸市看護大と神戸市外大で唯一置かれている状況が違うのが、卒業生が直面するマーケットだ。神戸市看護大は1億人の日本のマーケットで現在も存在価値があり、今後も高まるだろう。一方、神戸高専と神戸市外大の卒業生は、正直日本の1億人のマーケットだけではなく、例えば東南アジアを含めた約6億人、そういう海外のマーケットで活躍していかなければ、自分たちのやりたいこともできない。そのような学生が直面するマーケットという視点では、神戸高専は神戸市外大と重なるところがある。



# 課題解決と理想の将来像の実現に向けて（続き）

## （主な委員意見）

- 同じ大学法人の中に入るのなら、何らかのシナジー効果を求める事になるのだが、高専と教育課程が全く違い、やっている内容も違っている大学と一緒にしてシナジーを出すことは相当難しいことでもある。どこをターゲットとして、どのような人材育成を目指すのか、どこを目標として設定するのか、はっきりさせないといけない。
- グローバル化と情報化が進む社会で仕事をしていく上で、高専の学生にとって世界の共通言語としての英語は必須、一方で外大の学生にとってもプログラミングの考え方など情報化の基本的な知識がないと、グローバルな世界ではかなり競争力が落ちてしまう。
- 多くの大学で情報教育が始められており、既に色々な大学が戦略的に進めている中では、神戸高専と神戸市外大が同じ法人に入る際に、どのようなリソースを共有できて、どうすれば効果的なのかと言う点が重要だ。例えば、神戸高専の中に英語による教育コースを設けたり、専攻科の学生が外大の特殊言語の授業を受講できるなど、特色を戦略的に打ち出さなければ強くなれない印象がある。



# 課題解決と理想の将来像の実現に向けて（続き）

## （主な委員意見）

- 神戸市外大の持つグローバルネットワークの活用を進めて欲しい。
- 高専と大学の一体運営の検討には、市としてのビジョンを確認し、その実現に有益なシナジー効果を検討する必要がある。高専にとってのメリットとともに、大学にとってのメリットも考えていくことが必要だ。

## ●その他 / 理想の将来像の実現に向けて

- 大学・高等教育機関の運営に多額の予算を投じることは、市民にその理由を説明できなければならない。予算投入の大きな理由として、人材輩出などによる地域貢献と市全体のブランド化への貢献があるが、そのためには市がどこを目指していて、そこに高専や大学がどのような効果をもたらせるのか、きちっと整理していく必要がある。
- 今後10年間で、情報関連技術や産業・グローバル化は劇的に進んでいくだろうが、それらのある程度示した上で、市の国際情報都市の10年・20年のビジョンを示し、その中で神戸高専・大学の道筋を示すことが必要。かなり難しいことだが、色々な調査をした上で示すことになるので、その過程で説得力を持ったストラテジーが出てくればよいと思う。

